



いしかわ多胎ネット ニュース・レター

No.8 2010年3月



助成金を獲得しました。さらに活動を広げていきましょう！



2009年度から2010年度にかけて、いしかわ多胎ネットでは2つの外部助成金を受けることができました。これは、いしかわ多胎ネットの活動が社会的にも評価され、また多胎育児支援そのものの重要性が広く認められてきた結果だと思えます。

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成の事業では、石川県全域を対象とした多胎育児家庭を支援するネットワークの充実と支援活動の円滑化を目的としました。2009年度後半の半年間でしたが、ピアサポート活動を担える人材の養成と多胎育児支援の普及啓発活動を実施しました。具体的な事業としては、ピアサポート活動の充実（ピアサポーター養成講座、コーディネーター会議、事後報告会、事例検討会の開催）、地区交流会や近隣県との交流会開催、多胎育児支援のシンポジウム開催、多胎育児支援の啓発パンフレットの作成、多胎育児支援の現状調査など、非常に盛りだくさんの活動を行いました。

朝日新聞厚生文化事業団の助成事業では、主にピアサポート活動とその有効性を検証することを目的としています。この事業は2010年度を中心に行います。ピアサポート活動では、サポートを受けた方だけでなく、サポートを行った方も、さらには組織までが力をつけられると言われます。また、父親を含めた家庭メンバーへのサポートや、特別なニーズをもった家庭への支援も充実させていくことを考えています。

2010年度も引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

大木秀一

総会のご案内： 2010年5月15日（土）金沢市

いしかわ多胎ネットの総会とシンポジウムを行います。皆様ぜひおこし下さい。

日時：平成22年5月15日（土）13：30～16：00

会場：教育プラザ富樫（金沢市富樫）

シンポジウムテーマ：「ふたご・みつごママの本音トーク」

～ふたご・みつごの妊娠・出産・育児の不安を解消してくれたのは
同じ体験をされたママ（ピア）でした



能登地区交流会報告

玄田朋恵

2009年10月31日（土曜日）に能登中部保健福祉センター羽咋地域センターで能登地区交流会が開かれました。参加者は5組で、講師、スタッフ、津田保健師、高木保健師、保育者、アルバイトの他に、かもママ富樫さんが来てくださいました。また、北陸中日新聞、北国新聞の取材がありました。

予定の通り、インフルエンザ状況を気にしながらの開催。タイムテーブルにそって、アロマの癒しの香りの中、フットセラピー、ハンドセラピーで先輩ママ達とおしゃべりしながら、リラックスしてもらいました。休日でお母さんに甘えたい、知らない所に来てという事もあり2歳～4歳くらいのお子さん達で、ママから離れないでいたりする子もいました。でも、フットセラピーコーナーではママと一緒に足湯でにこにこ（*^_^*）もっともっと来て頂きリラックスタイムを楽しんでもらいたかったで～す。ママ達は気持ち良さそう！！



畠中さんのメッセージには、先輩ママとしての暖かい言葉があって参加者の皆さんも励まされたと思います。参加者の声から：☆今、年中組、良く保育園では2人で遊んでいる、2人の世界がある感じ、やっと少し楽になったと思う。3歳ころまでは気が変になりそうでとにかく友達に電話やメールして聞いてもらった。勤めるようになって朝保育園に行くまでの準備でイライラ、言うこときいてくれない、もう毎日イライラたいへんだれか私の気持ちわかって！仕事から夕方帰ってくると、くっついて離れないので食事の用意もやっと！少しずつだと思う。2人が髪を引っ張り合ったり、噛んだりして、祖父母が疲れて、疲れて。休日に親子で出かける良い場所は・・・？これからの季節は☆

終わった後で、保健師さん、スタッフ、看護大の学生さん、院生の方、フット、ハンドセラピーの方、保育士の方、富樫さんで輪を作り一人一言は、いろいろな立場からの意見が聞けて良かった。保育士さんの中に双子が40歳の方がいて、その励ましの言葉は暖かった。



同室にいろいろな立場の方がいて、子ども達も同室見守り保育で、アットホームな感じの交流会ができたと思います。また、山中からかもママの富樫さんが来てくださったので、当事者でない方の支援がある事も紹介して頂き、加賀から能登までの支援を感じてもらいました。大木先生からいしかわ多胎ネットの活動についてお話して頂いた事もよかったですと思いました。（^u^）

これから、小丸山のチャイルドケアハウスで定期的に多胎ママ達が集まる会を設けて頂ける予定です。他の場所でも集えるように支えていきたいと思っています。

全国の多胎家庭、多胎育児支援者、研究者、専門職などが結集して、一般社団法人 日本多胎支援協会（JAMBA）が平成22年2月22日（2が5つ並んでいるので「双子の日」）に設立されました。いしかわ多胎ネットも参加します。今後の活動に注目ください。

1月24日（日）、石川県立生涯学習センターにて、「当事者と行政・医療・ひろばをつなぐ多胎児支援」シンポジウムが開催されました。前日の23日（土）「日本双生児研究学会」が当会場で開催されるのに合わせて、いしかわ多胎ネットが主催したものです。

これまでは多胎育児特有の子育て不安や、身体的負担を当事者が抱え込み、行政はもちろん助産師や保健師等でも多胎育児の大変さを理解し支援してくださる方は少なく、多胎児サークルの先輩ママ達が支援者となってきました。しかし先輩ママ達が出来る支援にも限界があり、地域の専門職、行政、子育て支援者を巻き込んだ多面的な支援が必要になってきました。

そこで多面的な多胎児支援を先駆的に行っている石川県（いしかわ多胎ネット）から、「支援の輪」が全国に広まっていく事を目的にシンポジウムを開催することになりました。

シンポジウムに先立って「ブロック別座談会」を開催。専門職ブロックでは「研究者は上からではなく、丸い輪のようにいろいろな人が平等に関わっている状態が理想」「人数の少ないサークルは、最初は専門職の方が手伝ってあげないといけない」「多胎児だけにこだわるのではなく、普通にみんなが集まる中に多胎児家庭もいるという状態がいい」という意見。各地の多胎ネットのブロックでは当事者の方々の自己紹介や多胎ネットの活動内容の紹介等。「全国」のグループでは、長年サークル活動を継続している団体の活動内容や、少ない運営資金の中でサークル活動を継続されている団体等の紹介の後、シンポジウムの座長である中橋さんから「自分達の継続した活動実績、活動による効果をもっと行政、企業に売り込んでいくべきだ」というアドバイスもありました。

まだまだ話し足りない中シンポジウムに移り、県外から結婚により石川県へ、気候・風習の違う土地での生活、不妊治療、高齢出産、罪悪感等々の生々しい経験談、支援者との出会いで仲間ができ、子育てに前向きになれ今は自分が支援者になっている地元の方や、「ぎふ多胎ネット」や「ひょうご多胎ネット」の方々からは、多胎ネットの成り立ちや、活動内容の発表が行われました。指定発言者からはそれぞれの立場で感想や意見が述べられました。最後に座長の中橋恵美子さんが、「当事者たちのネットワークは「大変だった」ことが多胎児サークルを立ち上げるきっかけ、エネルギーになっているが、以前に比べ行政が子育て支援策を打ち出しているのでエネルギーを持った人が少ない。これまでの活動の有益性を認識し、共有し、社会で確認してもらってPR力をつけることが大事。思っていることは言い続け、直接的なつながりはなくても誰にでも伝えていく事で、支援する機会が増え、理解してもらえる。継続していくことで社会が明るくなり、仲間を増やしていく事ができる。双子、三つ子にやさしくなれば、子育て全体がやさしくなれ、社会の財産になっていく」とまとめてくださいました。

これまでの多胎育児支援の枠を越えた中橋さんの立場からのまとめは新鮮で、支援者として今自分達がしなければいけないことは、「自分達が変わろうと思っているかどうか自分達の活動を整理すること」「さりげないサポートをもっと身に付けていくこと」「地域を上手に育てていくこと」だと気づかせていただきました。

今回全国から集まってくださった方々、登壇者、指定発言者、座長、司会コーディネーター、担当の皆様、ほんとうにありがとうございました。

去る1月23日(土曜日)に石川県立生涯学習センターを会場に、「日本双生児研究学会第24回学術講演会」が開催されました。いしかわ多胎ネット代表の大木秀一さんが大会長を務め、金沢では2回目の大会開催でした。前回の学会の準備の中で、いしかわ多胎ネットを立ち上げることが決まった、ゆかりのある学会です。

学会は、一般の講演とシンポジウム、学会奨励賞の受賞記念講演の三部構成で、多胎育児および育児支援についての研究、多胎児(老年まで)についての研究、多胎児を使った研究など多彩なものとなりました。多胎ネットに関係の深いものとしては、多胎育児サポートネットワークの田中輝子さんが発表した「多胎育児支援全国普及事業について」や杏林大学の佐藤喜美子さんが発表した「多胎育児ピアサポート活動の課題」がありました。また、多胎育児者の抱えている問題を扱った発表には、日本赤十字看護大学の藤井美穂子さんの「双子の母親の出産後3ヶ月から1年6ヶ月までの離乳の方法とその思い」がありました。双子自身を直接扱った研究には、大阪大学の西原玲子さんが代表して発表した「高齢双生児の社会的役割、手段的日常生活動作に関係する遺伝的要因についての研究」があり、報告者も自分の老後を考えさせられました。とてもユニークで、なおかつ聴衆の微笑を誘ったのは、野寄茉莉さんが代表して発表した「ふたごまるまるプロジェクト」です。このプロジェクトは双子の日常を「まるまる」撮影するというもので、二人の係わり合いなどがそのまま映像化されるので、双子の自我の成長や関係性の展開がうまく追跡できます。双子たちが大きくなると一画面に入れることが難しくなるのですが、今後の研究の進展が楽しみです。



【開会の挨拶をする大木秀一代表】



【活動紹介コーナー】

シンポジウムでは、「研究者と協力者のよりよい関係を考える」と題して、研究を遂行する上で研究に協力する当事者と研究者がどのようによい関係を構築するか話し合わせ、報告者が司会をしました。この問題は簡単に結論の出るものではありませんが、両者がお互いを理解・尊重した上で、特に研究者側が、当事者のボランティア精神を安易にあてにすることなく、きっちりとフィードバックをする必要が強く意識されました。

その意味でも、今回の大会の運営にご協力いただいた多くのいしかわ多胎ネットの会員みなさまに心からお礼を申し上げたいと思います。みなさん、ご苦労様でした。そして、ありがとうございました。

いしかわ多胎ネット お問い合わせ先

<http://ishikawa-tatai.net/>

志村 恵 (電話・FAX 連絡)
〒920-1192 石川県金沢市角間町
金沢大学人社学域

Tel : 076-264-5345 Fax: 076-264-5362
E-mail : megumi@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

大木 秀一 (郵便物・電話・FAX 連絡)
〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ 7 番 1
石川県立看護大学健康科学講座

Tel / Fax : 076-281-8377
E-mail : sooki@ishikawa-nu.ac.jp